

四種三昧の典拠とその考察（上）

—常坐三昧・常行三昧について—

大野榮人

インドでおこった仏教が中国に将来され、中国人の仏教として攝取されて以来、中国人による独自の仏教の理解と展開があつたればこそ、大乗仏教の根本義がより明確にされた。漢語に翻訳され言語上の制約があるとはいへ、諸經論の説く根本原理を、人間の生きゆく理念とし、具体的現実的な実践法を、自らの体験的境界を根拠として表詮していくのである。中でも独自の教学体系を確立していった第一人者として、天台智顗を挙げ得ることができる。

周知のように、天台智顗の確立した天台止観の体系は、『摩訶止観』に広説され、それをして田頓止観といい、二十五方便・十境十乘觀法として、前代未聞の教学体系を案出していくことは、驚異に価することである。後世に大なる影響を与えたことからも、禪觀思想史上どうしても等閑視

することはできない。これから論究しようとする四種三昧は、智顗のいわゆる後期時代の講説にかかる『摩訶止観』卷第二上の五略中の第二修大行に説示されている。

わたくしは先の日本仏教学会において、「天台智顗の三昧思想考⁽¹⁾」と題して、智顗の四種三昧が成立していく発展過程を、龍樹・慧思の三昧思想をとおしてみてゆき、智顗の前期時代の三昧思想から、後期時代にかかる『摩訶止観』所説の四種三昧への展開とその思想について論究したのである。紙数の関係もあり十分に意を尽くすことができず、他にも問題とすべき幾多の課題が残されている。

そこでこの小論では、智顗が四種三昧を説示するに当つて、おのおの經証・依拠として經論を挙げ、それに基因して廣説していくのであるが、まず經証・依拠として挙げ

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

る經論の典拠を対照表によつて明示し、さらにその典拠と『摩訶止観』の説相との相違点あるいは問題点をみてゆくことに中心主眼をおいて論究してゆきたい。それを明らかにしてこそ、智顕のいわんとする四種三昧の根本義を明確に位置づけることができ、また智顕が四種三昧の体系を確立していくつた実踐法門の足跡を、いくらかでも窺い知ることができると考へるからである。

さて、四種三昧中、平行半坐三昧と非行非坐三昧には智

「摩訶止観」卷第二上(大正藏四六・一二 a ト b)の文

- | | |
|---|---------------------------------------------|
| 4 | 法華云、又見仏子修種種行以求仏道。 |
| 3 | 二明勸進四種三昧入菩薩位、說是止觀者、夫欲登妙位、非行不階。
善解鑽搖醍醐可獲。 |
| 2 | |
| 1 | |

経証としての経論の文

如乳不仮縁必当成酪、生酥不爾要待因緣、所謂人功水瓶鑽繩、衆生亦爾、云云（南本涅槃經卷第二十六、大正藏二二・七七c）、「一円頓觀、從初發心即觀實相、修四種三昧、行八正道。即於道場開仏知見得無生忍、如牛食忍草即得醍醐。……又約行者、大機稟頓即破無明、得無生忍行如醍醐（法華玄義卷第十上、大正藏三三・八〇六b—八〇七b）

顎自らが撰述した別行本があり、それについては別の機会に論究する。いまここでは、別行本のない常坐三昧と常行三昧について考察を加えてゆきたい。また草安灌頂の『観心論疏』卷第三にも四種三昧が説示されており、説相は『摩訶止観』と相違する箇所もあるが、ここでは特に問題となる相違点についてのみ触れてゆく。なお、△・▽を付した箇所は、間接的な典拠で、参考までに挙げておいた。

5 行法衆多略言其四。一常坐・二常行・三平行半坐・四
非行非坐。

6 通称三昧者、調直定也。

7 大論云、善心一處住不動、是名三昧。

8 法界是一處、正觀能住不動、四行為緣觀心、藉緣調
直。故通稱三昧也。

さて、右の対照表に基づいて以下考察を加えてゆく。ま
ず、(5)の上段にいう如く、大乗の諸經論には實に多種の禪
定・三昧行法が廣説されており、智顕はこれらの禪定・三
昧を円頓止觀の三昧行法として、智顕が隨處で用いる四門
分別に基づき、四種の範疇に限定・統摂したものである。
即ちその四種とは、常坐三昧・常行三昧・平行半坐三昧・

非行非坐三昧で、身儀に約して禪定を四種に分類し、また
法行に約せば、常坐は一行三昧、常行は般舟・仏立三昧、
平行半坐は方等・法華三昧、非行非坐は隨自意・覺意三昧
のことである。⁽²⁾

また、(6)・(7)の上段にいう如く、智顕は三昧の義を「調
直定」であると規定し、各自の心を現前當面の法界の一處

に住せしめて散乱なき状態であるという。この調直定の出典は不明であるが、(6)の下段に示したように、『法華玄義』卷第四上にも闡説されており、そこでは「十五三昧を調直定となし、三諦を具足するので三昧であると述べている。また、この四種三昧という名称は、恐らく(7)の下段の『智度論』の文を典拠としたかと推定される。

つぎに、(8)の上段の「法界は是れ一処なり、正観よく住して動ぜず、四行を縁となして心を観じ、縁を藉りて調直なり。故に通じて三昧と称するなり」と述べる文は、十境十乗觀法と四種三昧の関係について、智顕の立場を明確に示している。つまり四種三昧には『法華經』のみでなく、『大品經』所説の百八三昧等のごとき諸經論所説の諸三昧をも統攝するため、諸經論に基づいて廣説するが、究局的

には四種三昧は十境十乗觀法を修するための縁であり、逆に十境十乗觀法が四種三昧をして円頓止觀の三昧たらしむる觀法であるという如くである。しかし四種三昧は三昧であり、調直定の義なりといわれるよう、あくまでも禪でありまた定があるので、解脱智を開発するための縁であり、一方、十乗觀法は解脱智の活動のための因であるとも考えられる。

とはいって、『摩訶止觀』卷第一上には、
方便・正観は、ただはれ四三昧なるのみ。……故に知ぬ。広略あれども意は同じきことを。⁽³⁾

と、二十五方便・十境十乗觀法と四種三昧とは広略の相違があるのみで、意は同じであるという。

〔一〕 常坐三昧

『摩訶止觀』卷第三上(大正藏四六・一一a一一二a)の文

『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』(大正藏八・七二六a一七三c)・『文殊師利問經』(大正藏一四・四九二b一五〇九a)の文

1 一常坐者、出文殊説・文殊問両般若。

〈文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經一卷・文殊師利問經一卷〉

2 名為一行三昧。

仏言、文殊師利、如般若波羅蜜所說行、能速得訶縛多羅三藐三菩提、復有一行三昧。……文殊師利言、世尊、云何名一行三昧。仏言、法界一相、繫緣法界是名一行三昧。若善男子善女人、欲入一行三昧、當先聞般若波羅蜜如說修學、然後能入一行三昧。如法界緣不退不壞、不思議無礙無相、云云（大正藏八・七三一a—b）

3 今初明方法、次明勸修。方法者、身論開遮・口論說默・意論止觀。

4 身開常坐、遮行住臥

5 或可處衆、獨則弥善。

6 居一靜室或空閑地、離諸喧鬧。

7 安一繩床、傍無余座。

8 九十日為一期、結跏正坐。項・脊端直、不動不搖不萎不倚、以坐自誓、肋不拄床。況復屍遊戲住立。

我今云何獨坐道場、何以故、現見諸法住實際故（大正藏八・七二七c）

忘處空閑捨諸亂意（大正藏八・七三一b）、不著諸法相樂寂靜處（大正藏一四・五〇七a）

復於九十日修無我想、端坐專念、云云（大正藏一四・五〇七a）、隨仏方所端身正向（大正藏八・七三一b）、問曰、多有坐法、併、何以故唯用結跏趺坐。答曰、諸坐法中結跏趺坐最安隱不疲極、此是坐禪人坐法、攝持手足心亦不散、又於一切四種身儀中最安隱、此是禪坐取道法坐、魔王見之

- 10 9 除經行食便利。
- 11 隨一仏方面、端坐正向、時刻相續、無須臾廢。
- 12 所開者專坐、所遮者勿犯。
不欺仏、不負心、不誑衆生。

其心憂怖、如是坐者出家人法。……（中略）……
若結跏趺坐、身安入三昧、威德人敬仰、如日照天下。
除睡嬾覆心、身輕不疲懈、覺悟亦輕便、安坐如龍蟠。
見画加趺坐、魔王亦懷怖、何況入道人、安坐不傾動。
以是故結跏趺坐。……結跏趺直身坐。何以故、直身心易正
故、其身直坐則心不嬾、端正意繫念在前。若心馳散攝之
令還。欲入三昧故、種種馳念皆亦攝之（大智度論卷第七、大
正藏二五・二一b）。

除食及經行大小便時、悉不得起（大正藏一四・五〇七a）
繫心一仏專稱名字隨仏方所端身正向、能於一仏念念相續
(大正藏八・七三一b)

悉不得起（大正藏一四・五〇七a）

「若菩薩一心不惜身命、有方便求仏道者、十方諸仏及諸大
菩薩皆共護持、以是因緣故能成仏道。若為菩薩而有懈怠貪
著世樂、不能專心勤求仏道、是則自欺亦欺十方諸仏及諸菩
薩。所以者何、自言我為一切衆生故求仏道、而行雜行壞菩
薩法、以是罪故、諸仏菩薩所不守護、魔得其便（大智度論卷
第五十六、大正藏二五・四五八b）」

若坐疲極、或疾病所因、或睡蓋所覆、
内外障侵奪正念心不能遣却、當專稱一仏名字、
慚愧懺悔以命自帰。

17
与称十方仏名功德正等。

18
所以者何、如人憂喜鬱拂拳声歌哭悲笑則暢。

19
行人亦爾。風触七處成身業、声響出唇成口業、二能助
意成機感仏俯降。

不取相貌繫心一仏專称名字（大正藏八・七三一b）

慚愧懺悔恭敬供養、事說法人如供養仏。……常懷慚愧自省
己罪（大正藏一四・五〇七a-b）

念一仏功德無量無邊、亦與無量諸仏功德、無二不思議、仏
法等無分別、皆乘一如成最正覺、悉具無量功德無量弁才
(大正藏八・七三一b)

△若語声、若打声從声有声名為響。無智人、謂為有人語声、
智者心念、是声無人作、但以声触故更有声名為響、響事空
能詮耳根、如人欲語時。口中風名憂陀那、還入至臍触臍響
出、響出時触七處退、是名語言、如偈說、

風名憂檀那 觸臍而上去 是風七處触 項及斷齒脣
舌咽及以胸 是中語言生 愚人不解此 惑著起瞋癡
中人有智慧 不瞋亦不著 亦復不愚癡 但隨諸法相
曲直及屈申 去來現語言 都無有作者 是事是幻耶
為機閑木人 為是夢中事 我為熱氣悶 有是為無是
是事誰能知 是骨人筋纏 能作是語声 如融金投水
以是故言諸菩薩知諸法如響（大智度論卷第六、大正藏二五
一〇三a-b）

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

如人引重自力不前、仮傍救助則蒙輕拳。

行人亦爾、心弱不能排障、称名請護惡緣不能壞。

若於法門未了、當親近解般若者、如聞修學。

23 能入一行三昧、面見諸仏、上菩薩位。

24 誦經誦呪尚喧於靜、況世俗言語耶。

意止觀者

26 端坐正念。蠲除惡覺捨諸亂想、莫雜思惟、不取相貌。

當先聞般若波羅蜜、如說修學、然後能入一行三昧。……諸經法門一一分別、皆悉了知決定無礙（大正藏八・七三一 a - b）
能入一行三昧、……即是念中能見過去・未來・現在諸仏（大正藏八・七三一 b）

隨仏方所端身正向、能於一仏念念相續（大正藏八・七三一 b）、端坐專念（大正藏一四・五〇七 a）

應處空閑捨諸亂意、不取相貌繫心一仏專稱名字（大正藏八・七三一 b）、復於九十日修無我想、端坐專念不雜思惟、……復次文殊師利、當具足諸善常念如來、專心思惟不起亂想（大正藏一四・五〇七 a - b）

文殊師利言、世尊、云何名一行三昧。仏言、法界一相、繫

緣法界是名一行三昧。……如法界緣不退不壞。……不取相貌繫心一仏專稱名字（大正藏八・七三一 a - b）

若信一切法悉是仏法、不生驚怖亦不疑惑（大正藏八・七三

28 信一切法皆是仏法、無前無後無復際畔、

28

29

無知者者無說者。若無知無說則非有非無、非知者非不知者、離此二邊住無所住、如諸仏住安處寂滅法界。聞此深法勿生驚怖。

30

此法界亦名菩提、亦名不可思議境界、亦名般若、亦名不生不滅。如是等一切法與法界無二無別、聞無二無別勿生疑惑。

31

能如是觀音、是觀如來十号。

32

觀如來時不謂如來為如來。無有如來為如來、亦無如來智能知如來者。如來及如來智。無二相、

一c）、法界無邊無前無後（大正藏八・七二八b）

舍利弗、無分別中則無知者。若無知者即無言說、無言說相、即非有非無非知非不知。……一切諸法亦復如是。何以故、一切諸法不見處所。決定性故（大正藏八・七二八b）、離此二邊住無所住、如諸仏住安處寂滅非思議境界（大正藏八・七二九c）、是故比丘比丘尼、聞說是甚深般若波羅蜜、不生驚怖（大正藏八・七三一c）

一切法無相、一切法無作、般若波羅蜜即不思議、不思議即法界、法界即無相、無相即不思議、不思議即般若波羅蜜、般若波羅蜜法界、無二無別、無二無別即法界、法界即無相、無相即般若波羅蜜界、般若波羅蜜界即不思議界不思議界即無生無滅界、無生無滅界即不思議界（大正藏八・七二九c）、欲知如是等相無疑惑者、當學般若波羅蜜（大正藏八・七三〇c）

有人於此欲見彼仏。當云何得見。仏告文殊師利、若能專念如來十号、仏於彼人常在不滅（大正藏一四・五〇六c）

爾時世尊告文殊師利、汝言我是如來、謂我為如來乎。文殊師利言、不也世尊、我謂不是如來為如來耶。無有如相可名為如、亦無如來智能知於如。何以故、如來及智無二相故（大正藏八・七二八c）

33 無動相、不作相、不在方不不離方、非三世非不三世、
非二相非不二相、非垢相非淨相。

34 此觀如來甚為希有。

35 猶如虛空無有過失增長正念。見仏相好如照水鏡自見其形。初見一仏、次見十方仏。不用神通往見仏、唯住此處見諸仏聞仏說法、得如實義。

36 猶如虛空無有過失增長正念。見仏相好如照水鏡自見其形。初見一仏、次見十方仏。不用神通往見仏、唯住此處見諸仏聞仏說法、得如實義。

37 無形無相無見聞知、仏不証得。是為希有。

文殊師利即白仏言、如是世尊、我實來此欲見如來。何以故、我樂正觀利益衆生、我觀如來如如相、不異相不動相不作相、無生相無滅相、不有相不無相、不在方不離方、非三世非不三世、非二相非不二相、非垢相非淨相、以如是等、正觀如來利益衆生（大正藏八・七二六b）

見如來者甚為希有（大正藏八・七二六b）

復次文殊、念仏十号猶如虛空、以知如虛空故無有過失、以不失故得無生忍、如是依名字增長正念。見仏相好正定具足、具足定已見彼諸仏、如照水鏡自見其形。彼見諸仏亦復如是、此謂初定。復次如一仏像現鏡中分明、見十方諸仏亦如是分明。從此以後常正念思惟必有相起、以相起故常樂見仏、作此念時諸仏即現。亦不得神通亦不往彼世界、唯住此處見彼諸仏、聞仏說法得如實義（大正藏一四・五〇六c-一五〇七a）

為一切衆生見如來、而不取如來相。化一切衆生向涅槃而不取涅槃相。為一切衆生堯大莊嚴而不見莊嚴相。

見莊嚴之相（大正藏八・七二六b）

無見無聞無得無念、無生無滅無說無聽、如是菩提性相空寂、無證無知無形無相、云何當有得菩提者、舍利弗語文殊師利言、仏於法界、不証阿耨多羅三藐三菩提耶（大正藏八・七二八b）

38

何以故、仏即法界。若以法界証法界即是諍論、無証無得。

39

觀衆生相如諸仏相、衆生界量如諸仏界量、諸仏界量不可思議、衆生界量亦不可思議、衆生界住如虛空住、以不住法以無相法住般若中。

40

不見凡法云何捨、不見聖法云何取、生死・涅槃・垢淨亦如是。

41

不捨不取、但住實際。

藏八・七二八b)

文殊師利言、衆生界相如諸仏界。又問、衆生界者是有量耶。答曰、衆生界量如仏界量。仏又問、衆生界量有處所不。答曰、衆生界量不可思議。又問、衆生界相為有住不。答曰、衆生無住猶如空住。仏告文殊師利、如是修般若波羅蜜時、當云何住般若波羅蜜。文殊師利言、以不住法為住般若波羅蜜。仏復問文殊師利、云何不住法、名住般若波羅蜜。文殊師利言、以無住相、即住般若波羅蜜（大正藏八・七二六c）

則不捨凡夫法、亦不取賢聖法。何以故、般若波羅蜜不見有法可取可捨、如是修般若波羅蜜、亦不見涅槃可樂生死可厭。何以故、不見生死況復厭離、不見涅槃何況樂著、如是修般若波羅蜜、不見垢惱可捨、云々（大正藏八・七二七a）

法無取捨住實際故（大正藏八・七二七a）、
「仏言、云何身見是實際。文殊師利言、身見如相、非實非不實、不來不去亦身非身、是名實際（大正藏八・七二七c）」

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

如此觀衆生真仏法界。

觀貪欲瞋恚諸煩惱、恒是寂滅行、是無動行。非生死法、非涅槃法。不捨諸見、不捨無為、而修仏道。非修道、非不修道。

是名正住煩惱法界也。

45 44
觀業重者、無出五逆。五逆即是菩提、菩提・五逆無二相。無覺者、無知者、無分別者。

46
逆罪相・實相相、皆不可思議不可壞、本無本性。一切業緣皆住實際、不來不去非因非果。

文殊師利白仏言、世尊、菩提即五逆、五逆即菩提。何以故、菩提・五逆無二相故。無覺無覺者、無見無見者、無知無知者、無分別無分別者、如是之相名為菩提、見五逆相亦復如是（大正藏八・七二八c）

加逆罪相不可思議。何以故、諸法實相不可壞故、如是逆罪亦無本性、不生天上不墮地獄亦不入涅槃。何以故、一切業緣皆住實際、不來不去非因非果。何以故、法界無邊無前無後故（大正藏八・七二八b）

是為觀業即是法界印。

48 47
法界印四魔所不能壞魔不得便。

何以故、魔即法界印。法界印云何毀法界印。以此意歷一切法亦應可解。

無相法印不可讚毀、我今以是法印、令諸天魔不能得便（大正藏八・七三三c）

爾時仏告文殊師利言、如諸如來自說己智、誰當能信。文殊師利言、如是智者、非涅槃法非生死法、是寂滅行是無動行、不斷貪欲瞋恚愚癡、亦非不斷。何以故、無盡無滅不離生死亦非不離、不修道非不修道、作是解者名為正信（大正藏八・七三〇a）

上所說者皆是經文。

勸修者

稱實功德、獎於行者。法界法是仏真法、是菩薩印。

聞此法不驚不畏、乃從百千万億仏所久植德本。

55 譬如長者失摩尼珠後還得之、心甚歡喜。四衆不聞此法

心則苦惱、若聞信解歡喜亦然。當知此人即是見仏。已曾從文殊聞是法。

56 身子曰、諦了此義、是名菩薩摩訶薩。

57 弥勒云、是人近仏座、仏覺此法故。

仏告文殊師利、若人得聞是法不驚不畏者、不從千仏所種諸善根、乃至百千万億仏所久植德本（大正藏八・七二七b）、是善男子善女人、於過去諸仏、久已修學殖衆善根（大正藏八・七三〇b）

譬如長者失摩尼寶憂愁苦惱、後若還得、心甚歡喜。如是迦葉、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷等、亦復如是。有信樂心、若不聞法則生苦惱。若得聞時信解受持、常樂繞誦甚大歡喜。當知此人即是見仏。……當知是人已從此會聽受是經。……譬如有人以手穿珠、忽遇無上真摩尼寶、心大歡喜。當知是人必已曾見（大正藏八・七三〇a-b）

舍利弗白仏言、世尊、若於斯義諦了決定、是名菩薩摩訶薩（大正藏八・七二七c）、若善男子善女人、有能如是諦了斯義（大正藏八・七三〇c）

弥勒菩薩白仏言、世尊、得聞如是般若波羅蜜具足法相、是即近於仏坐。何以故、如來現覺此法相故（大正藏八・七二七c）

58 故文殊云、聞此法不驚即是見仏。

59 仏言、即住不退地、具六波羅蜜、具一切仏法矣。

文殊師利白仏言、世尊、得聞甚深般若波羅蜜、能不驚不怖
不悔、當知此人即是見仏（大正藏八・七二七c）

60

若人欲得一切仏法相好威儀說法音声十力無畏者、當行
此一行三昧。勤行不懈則能得入。

具足無礙（大正藏八・七三〇c）

61

如治摩尼珠隨磨隨光、証不可思議功德。

欲學一切仏成阿耨多羅三藐三菩提時相好威儀無量法式、當
學般若波羅蜜（大正藏八・七三〇c）、當念一行三昧常勤精
進而不懈怠、如是次第漸漸修學、則能得入一行三昧（大正藏
八・七三一b）

62

菩薩能知速得菩提。比丘・比丘尼聞不驚、即隨仏出家、
信士・信女聞不驚、即真歸依。

不可思議功德作証、……復次文殊師利、譬如有人得摩尼珠
示其珠師、珠師答言、此是無價真摩尼寶、即求師言、為我
治磨勿失光色、珠師治已隨其磨時、珠色光明映徹表裏（大
正藏八・七三一b）

63

此之稱譽出彼兩經云云。

この常坐三昧は、(1)の上段にいうように、梁の曼陀羅仙が天監11年(5011)に“Saptasatikā nāma Prajñāpāramitā sūtra”(七百頌般若)を訳した『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』11巻(以下略して『文殊所説經』と呼称する。)の曼陀羅仙訳は『大寶積經』巻第百十五・百十六、大正藏一一・六五〇b—六五七aにも収録されている)、および

梁の僧伽婆羅が天監十七年(518)に訳した『文殊師利問經』11巻(以下略して『文殊問經』と呼称する)を根拠とし、さらに右の対照表の下段の出典からも明らかとなるよう、『大智度論』にも基づいて説示されたものである。『文殊所説經』には曼陀羅仙訳の他に、僧伽婆羅が天監五・普通元年(506—510)に訳した『文殊師利所説般若波羅蜜經』1巻があるが、たとえば「一行三昧」と訳すのは曼陀羅仙訳であり、僧伽婆羅訳では「不思議定」としており、訳語から考えても智顕が依用したのは恐らく曼陀羅仙訳であると思われる。また智顕は右の一經を根拠として説示したというのであるが、右の対照表にみられる如く、殆どの説相は曼陀羅仙訳の『文殊所説經』に基づいて広説されていいる。灌頂も『觀心論疏』巻第三に、『文殊所説經』のみを挙げているが、強ち不当ともいえない。

つぎに、(2)の上段の「一行三昧」という名称は『文殊所説經』の所説であるが、『大品般若經』では百八三昧中の八十一番目にみられる三昧であり、『大品經』巻第五では、「云何んが一行三昧と名づくるや、是の三昧に住するものは諸三昧の此岸と彼岸とを見ず。是を一行三昧と名づく。」

と、簡単な規定をなしているが、『智度論』巻第四十七には、「一行三昧とは、是の三昧は常に一行にして、畢竟空とのみ相應す。三昧中更に余行の次第なし。……諸三昧の入相を此岸と為し、出相を彼岸と為す。初得の相を此岸と為し、滅相を彼岸と為す。」

と述べ、一行三昧をして余行の次第のない三昧で、畢竟空とのみ相應する三昧といい、小乗的三昧の否定を示す三昧であると訳している。『大品經』や『智度論』には、一行三昧の具体的な内容や方式については全たく述べられていない。智顕が直接典拠として依用した『文殊所説經』になると、(2)の下段以下に明らかに如く、組織的・体系的な叙述がなされている。いまここに示すならば、

文殊師利の言く、世尊よ、云何んが一行三昧と名づく。仏の言く、法界は一相なり、法界を繋縁す、是れを行

三昧と名づく。……一行三昧に入らんと欲せば、當に先ず般若波羅蜜を聞きて、説の如く修学すべし。然る後に能く一行三昧に入る。法界の不退・不壞、不思議・無礙・無相を縁するが如し。……心を一仏に繋けて名字を専称し、仏の方所に随つて端身正向し、能く一仏に於いて念念相続すべし。即ち是れ念中に能く過去・未来・現在の諸仏を見るなり。⁽⁷⁾

と、一行三昧をして、「法界は一相なり、法界を繋縁す」と規定し、法界の平等一相を念する三昧であるとして、具体的な内容やその行規・形式などについて詳説している。智顕は右の『文殊所説經』の所説に基づき、とくに意の止観において、絶待止観の原理でもつて独自の内的展開をしていく。すなわち、⁽⁸⁾の上段の文に、

但だ専ら縁を法界に繋け、念を法界に一うす。繋縁は是れ止、一念は是れ観なり。

と、「繫縁法界」を止となし、「一念法界」を観として位置づけている。右の文から即座に想起するのが、『摩訶止観』卷第一上の、

円頓とは、初めより実相を念ず、境に造るに即ち中（道）にして、真実ならざることなし。縁を法界に繋け、念、

を法界に一うす、一色一香も中道にあらざることなし。己界および仏界・衆生界も亦た然なり。……純ら一実相にして実相のほか更に別の法なし。法性寂然なるを止と名づけ、寂にして常に照らすを観と名づく。初後を言うと雖も「無く別無し。是れを円頓止観と名づく。」と、三種止観を述べる中の、円頓止観を規定する文である。ここでも『文殊所説經』の文を根拠として円頓止観を説示している。また、「法性寂然」を止となし、「寂而常照」を観となし、先の止観の規定と同様に、非止非観の絶待止観を主張していくのである。

智顕はこの止と観について、『摩訶止観』卷第三上において(一)相待止観・(二)絶待止観・(三)会異名・(四)通三徳の四義に分けて詳説し、相待止観の止に息義・傍義・対不止止義の三義を、また観に貫穿義・観達義・対不観観義の三義を、さらに法華円教独自の止観理念として絶待止観を高揚していくのである。智顕は仏教全体の実践修道の方法を止観の理念の下に統一し、法華円教の実践法門を大成したのであるが、この背景には、南北朝末期までに行なわれていた雑多な禪観の名称や形式を止観の理念によつて総合確立しようと意図したかと推察される北魏の曇鸞や僧稠あるいは淨

影慧遠などの影響があつたかと考えられ⁽¹⁰⁾、智顗が総合的な体系を確立することの必要性を痛感したと思われる。『文殊所説経』の一一行三昧も、かかる歴史的必然性の下に止観の理念に基づいて規定されたと推定される。この止観の問題については、近刊の関口真大編著『止観の研究』（岩波書店）に、総合的視野から研究がすすめられており、益するところ大であるが、わたくしも別の機会に論じてゆきたいので、いまはこれくらいで留める。

つぎに問題となるのは、(8)の上段以下の「結跏正坐」の規定である。(8)の下段に示したように、『文殊所説経』には「端身正向」とあり、『文殊問経』にも「端坐專念」とあるが、具体的な規定は何等なされておらず、両經の所説ではない。智顕は恐らく、(8)の下段に示した『大智度論』の文を典拠として設定したと思われるが、直接には慧思が『隨自意三昧』の坐威儀品に、

四種の身の威儀の中、坐を最も安隱なりと為す。菩薩、常に応に跏趺端坐して動ぜず、深く一切の諸三昧門に入るべき。……結跏趺坐すれば、心は直に身は正しく、念を斂めること前に在り。復た諸の弟子禪定に入ることを

教えんと欲す。是の故に菩薩は結跏趺坐す。余の坐法は是れ凡人の坐法なり。⁽¹²⁾

と、述べる文に示唆を受けて設定したかとも推定される。この「結跏正坐」について、智顕はすでに前期時代の著述である『次第禪門』や『六妙法門』において端坐を身儀とする漸次止観と不定止観を説示し、また『小止観』や『覺意三昧』や『國清百錄』卷第一所収の方等懺法あるいはこの『摩訶止観』等において端坐正観と歴縁対境とを禪觀実修の基本として設定したのである。智顕が端坐正観と歴縁対境とを設けたことには深い理由がある。すなわち、結跏趺坐が禪觀実修の基本的身儀であることは、いうまでもなく仏陀のブッダガヤーにおける大悟成道以来の鉄則であり（端坐正観）、これを修したものが、六境および行住坐臥作作言語の日常生活の六縁に随つて、先に端坐正観した実相原理を実証する必要がある（歴縁対境）と考えたためと思われる。その点から推考すれば、智顕が四種三昧中最も重視したのは、端坐を身儀と規定するこの常坐三昧と、歴縁対境である非行非坐三昧であるといえる。

さらに、対照表(8)の上段の「九十日を一期となす」という文であるが、『文殊所説経』には期間を規定する文はなく

(8)の下段に示した文殊間経の所説を根拠としている。しかし灌頂の『観心論疏』にもこの規定はなく、この点より、のち灌頂が『摩訶止觀』の修治の際、九十日の規定をする『文殊問經』を加え、この常坐三昧の根拠として『文殊所説經』『文殊問經』を並記したと推察される。

つぎに、本尊および方向について、(10)の上段の、「一仏の方面に随って、端坐して正しく向い」と述べる文であるが、(10)の下段に示した如く、『文殊所説經』卷下には、「心を一仏に繋けて名字を専称し、仏の方所に随って端身正向し」と、特定の仏も方向も定めていないのであり、それは『観心論疏』においても同じである。がしかし湛然は、隨向の方は、必ず須らく正しく西にすべし。經には局つて西方に向わしめずと雖も、障起これば既に専ら一仏

〔二〕 常行三昧

『摩訶止觀』卷第二上(大正藏四六・一二a—一三a)の文

1 一常行三昧者、先方法、次勸修。方法者、身開遮・口

を稱えしめん。諸教の讀する所、多く弥陀に在り。故に西方を以て一準と為す。⁽¹³⁾

と、西方にして、しかも阿弥陀仏なりと規定している。この湛然の規定は經の本義・智顥の真意を歪曲したものといわねばならない。この阿弥陀仏の問題については、次の常行三昧の項で述べる。

また、湛然は意の止觀を釈するについて、一一の文を挙げて十乘觀法に対配しているが、兩者を廣略の相異のみであるとする、先に引いた『摩訶止觀』卷第一上の所説から考えれば、妥当な解釈ということができる。なお、その他箇處は右の対照表に明らかのように、おおむね典拠があり、問題はないと思われる。

- ・『一卷本般舟三昧經』(大正藏一三・八九七c—九〇二c)
- ・『三卷本般舟三昧經』(大正藏一三・九〇二c—九一九c)
- ・『十住毘婆沙論』(大正藏二六・一一〇a—一一三b)の文

說默・意止觀。

此法出般舟三昧經。

3 2 翻為仏立。仏立三義、一仏威力、二三昧力、三行者本功德力。

4 能於定中見十方現在仏在其前立。

5 如明眼人清夜觀星、見十方仏亦如是多、故名仏立三昧。

八一卷本般舟三昧經・三卷本般舟三昧經

何以故、如是毘陀和、是三昧仏力所成、持仏威神、於三昧中立者、有三事。持仏威神力、持仏三昧力、持本功德力。用是三事故、得見仏（三卷本・大正藏一三・九〇五c、一卷本・大正藏一三・八九九b、以降、「大正藏一三」は省略）

仏言、今現在仏悉在前立三昧（三卷本・九〇四b等）、有三昧名十方諸仏悉在前立（一卷本・八九八b等）

譬如毘陀和、菩薩明眼人夜半視星宿見星其衆多、如是毘陀和、菩薩持仏威神、於三昧中立、東向視見若干百仏、若干千仏、若干萬仏、若干億仏、如是十方等悉見諸仏（三卷本・九〇六b、一卷本・九〇〇a）

6 是三昧住處 少中多差別 如是種種相 皆當須論議
十住婆沙偈云、是三昧住處、少・中・多差別。如是種種相、亦應須論議。住處者、或於初禪・二・三・四中間、發是勢力能生三昧、故名住處。初禪少、二禪中、三・四多。或少時住名少、或見世界少、或見仏少故名少。中多亦如是。

是三昧住處 少中多差別 如是種種相 皆當須論議
是三昧所住處、少相中相多相、如是等應分別、知是事應當解釈。住處者、是三昧或於初禪可得、或第二禪、或第三禪、或第四禪可得、或初禪中間得勢力、能生是三昧、或少者人勢力少故名為少、又少時住故名為少、又見少仏世界故、名為少、中多亦如是（毘婆沙論卷第十二、大正藏二六・八八b）

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

- 8 行此法時避惡知識及癡人・親屬・鄉里、
亂精進、飯知足、不貪衣、不惜寿命、子身避親屬離鄉里
(三卷本・九〇四b-c、一卷本・八九九b)
- 9 常獨處止不得希望他人有所求索。常乞食不受別請。
當樂獨處止、不惜身命、不得慚望人有所索。常行乞食、
不受請 (三卷本・九〇九c、一卷本・九〇一a) • (毘婆沙論卷
第十六、大正藏二六・一二一c)
- 10 嚴飾道場備諸供具・香餚・甘果、盥沐其身、左右出入
改換衣服。
- 11 唯專行旋、九十日一期
- 12 須明師善内外律能開除妨障。
- 13 於所聞三昧處如視世尊、不嫌不恚不見短長。
- 14 当割肌肉供養師。況復余耶。承事師如僕奉大家。
得聞是三昧當視如佛。所聞三昧處當尊敬 (三卷本・九〇九
c)、當敬善師、不得視師長短 (一卷本・九〇〇a)
- 15 若於師生惡、求是三昧終難得。

與善知識共行空、除睡眠、不聚會、避惡知識近善知識、不
亂精進、飯知足、不貪衣、不惜寿命、子身避親屬離鄉里
(三卷本・九〇六b、一卷本・九〇〇a)

當念供養、當供養於佛、花香・擣香・飯食具足。當持善意
(三卷本・九〇六b)

道行無量不可稱。至于無數億劫中、仮使有人受持名、所周
旋處若夢中、如是勇猛導世間、皆當逮得無上道 (三卷本
・九一二a)、所周旋處聞是法、當普宣示諸學者、仮使億
千那術劫、求是三昧難得聞 (三卷本・九一九b)、「九十日
一期」は20の下段の出典を参照のこと。

當慈心常樂於善師 (三卷本・九〇六b)

當自割身肉供養於善師。何況寶物此不足言耳。承事善師
當如奴事大家 (一卷本・九〇二b、三卷本・九一九a)
毘陀和、菩薩於善師有瞋恚、有持善師、短視善師不如佛者、
得三昧難 (三卷本・九〇六b、一卷本・九〇〇a)

須外護如母養子。

須同行如共涉險。

18 17 16

須要期誓願、使我筋骨枯朽、學是三昧不得終不休息。

19 起大信無能壞者、起大精進無能及者、所入智無能逮者、常與善師從事。

20 終竟三月不得念世間想欲如彈指頃、三月終竟不得臥出如彈指頃、終竟三月行不得休息、除坐食左右、為人說經不得希望衣食。

自念、使我筋骨髓肉皆使枯腐、學是三昧終不懈怠。自念我終不懈怠也（三卷本・九〇九c）
菩薩有四事法、疾逮得三昧。何等為四。一者所信、無有能壞者。二者精進、無有能逮者。三者所入智慧、無有能及者。四者常與善師從事。是為四（三卷本・九〇六a、一卷本・八九九c）

菩薩復有四事、疾得是三昧。何等為四。一者不得有世間思想、如指相彈頃三月。二者不得臥出三月、如指相彈頃。三者經行不得休息、不得坐三月。除其飯食左右。四者為人說經、不得望人衣服飲食。是為四（三卷本・九〇六a、一卷本・八九九c）・（毘婆沙論卷第十二、大正藏二六・八六c）

21 婆沙偈云、親近善知識、精進無懈怠、智慧甚堅牢、信力無妄動。

問曰、如是定以何法能生、云何可得。答曰、親近善知識 精進無懈怠 智慧甚堅牢 信力不妄動 以是四法能生是三昧（毘婆沙論卷第十二、大正藏二六・八六b）

口說默者

22 九十日身常行無休息。

△三者經行不得休息、不得坐三月除其飯食左右（三卷本・九〇六a、一卷本・八九九c）

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

九十日口常唱阿弥陀仏名無休息。
九十日心常念阿弥陀仏無休息。

25 24

或唱念俱運、或先念後唱、或先唱後念、唱念相繼無休息時。

若唱弥陀即是唱十方仏功德等。

但專以弥陀、為法門主。

拳要言之、步步・声声・念念、唯在阿弥陀仏。

意論止觀者

31 30 29 28 27 26

念西方阿弥陀仏、去此十万億仏刹、在宝地・宝池・宝樹・宝堂、衆菩薩中央坐說經。三月常念佛。

32 云何念、念三十二相。

從足下千輻輪相、一一逆緣念諸相乃至無見頂、亦應從頂相順緣、乃至千輻論。令我亦逮是相。

33 徒足下千輻輪相、一一逆緣念諸相乃至無見頂、亦應從頂相順緣、乃至千輻論。令我亦逮是相。

心念西方阿弥陀仏、今現在隨所聞當念、去是間千億万仏刹、其國名須摩提。在衆菩薩中央說經。一切常念阿弥陀仏（三卷本・九〇五a、一卷本・八九九a）

仏言、專念故得往生、常念仏身有三十二相八十種好（一卷本・八九九b）、行者以是三昧念諸仏三十二相八十種好莊嚴其身（毘婆沙論卷第九、大正藏二六・六八c）

（當具足念諸仏端正、悉欲逮見一一想、當想識無有能見諸仏頂上者、悉具足作是想見諸仏、當作是念。我身亦當逮得如是、亦當逮得身想如是、亦當逮得持戒三昧如是（三卷本

卷本・九〇五b、一卷本・八九九a—b）

・九〇八b) >

又念、我當從心得仏、從身得仏。仏不用心得、不用身得、不用心得仏色、不用色得仏心。

35 何以故、心者仏無心、色者仏無色。故不用色心得三菩提。

36 仏色已盡乃至識已盡、仏所說尽者癡人不知知者曉了。

37 不用身口得仏、不用智慧得仏。何以故、智慧索不可得。自索我了不可得、亦無所見。一切法本無所有、壞本絕本。其一

38 如夢見七寶親屬歡樂、覺已追念不知在何處、如是念佛。

39 又如舍衛有女名須門、門之心喜、夜夢從事、覺已念之、彼不來我不往、而樂事宛然。當如是念佛。

当作是念、我從心得從身得。復更作念、仏亦不用心得、亦不用身得、亦不用心得仏、亦不用色得仏 (三卷本・九〇八b)

何以故、心者仏無心、色者仏無色、不用是心色、得阿耨多羅三藐三菩提 (三卷本・九〇八b-c)

何以故、仏色以盡、仏痛痒思想、生死識了盡、仏所說尽者、愚癡不見不知、智者曉了之 (三卷本・九〇八c)

作是念、當持何等心得仏、當持身得仏、當持智慧得仏。復作是念、亦不用身得仏、亦不用智慧得仏。何以故、智慧索不能得、自復索我了不可得、亦無所得、亦無所見。一切法本無所有念有因著。……何以故、說無所有、經說無所有、中不著、壞本絕本、是為無所著 (三卷本・九〇八c)

譬如人臥出於夢中、見所有金銀珍寶・父母・兄弟・妻子・親屬・知識、相與娛樂喜樂無輩。其覺以為人說之、後自淚出念夢中所見。如是飄陀和菩薩、若沙門白衣、所聞西方阿彌陀仏刹、當念彼方仏 (三卷本・九〇五a)

譬若有人、聞墮舍利國中、有姪女人名須門、……同時念、各於夢中到是姪女人所與共棲宿、其覺已各自念之。……若持是事為人說經 (三卷本・九〇五a-b、一卷本・八九九a)

- 40 如人行大沢飢渴、夢得美食、覺已腹空、自念一切所有法皆如夢。當如是念佛。
- 41 數數念莫得休息、用是念當生阿彌陀仏國。
- 42 是名如相念、如人以寶倚琉璃上影現其中。
- 43 亦如比丘觀骨骨起種種光。此無持來者、亦無有是骨。是意作耳。
- 44 如鏡中像不外來不中生、以鏡淨故自見其形。
- 45 行人色清淨所有者清淨。欲見仏即見仏。見即問、問即

（舍衛國有姪女人、名須蔓那、……昼夜專念心著不捨、便於夢中夢與從事、覺已心念、彼女不來我亦不往而姪事得辦、因是而悟（大智度論卷第七、大正藏二五・一一〇b））

時有人行出入大空沢中不得飲食飢渴而臥、出便於夢中得香甘美食、飲食已其覺腹中空、自念一切所有皆如夢耶。……常念所向方（三卷本・九〇五b）

爾時阿彌陀仏、語是菩薩言、欲來生我國者、常念我數數、常當守念、莫有休息、如是得來生我國。仏言、是菩薩用是念佛故、當得生阿彌陀仏國、常當念如是仏身（三卷本・九〇五b、一卷本・九〇五a-b）

如想空當念佛立、如以珍寶倚琉璃上。……常念所向方欲見仏菩薩一切見仏、如持珍寶著琉璃上。……自見其影耳（三卷本・九〇五c）

譬如比丘觀死人骨著前、有觀青時、有觀白時、有觀赤時、有觀黑時、其骨無有持來者、亦無有是骨、亦無所從來是意所作想有耳（三卷本・九〇五c、一卷本・八九九b）

如新磨鏡、……用麻油水精水鏡淨潔故、自見其影耳。其影亦不從中出、亦不從外入（三卷本・九〇五c、一卷本・八九九b）

（麤陀和、色清淨、所有者清淨。欲見仏即見。見即問、問即

報。聞經大歡喜。其二

46 自念、仏從何所來、我亦無所至。我所念即見、心作仏、心自見心、見仏心。是仏心是我心見仏。心不自知心、心不自見心。心有想為癡、心無想是泥洹。是法無可示者、皆念所為。設有念亦了無所有空耳。其三

47 假云、心者不知心、有心不見心。心起想則癡、無想即泥洹。

48 諸仏從心得解脫、心者無垢名清淨、五道鮮潔不受色、有解此者成大道。

49 是名仏印。無所貪、無所著、無所求、無所想。所有尽、所欲尽。無所從生、無所可滅、無所壞敗。道要、道本。是印二乘不能壞、何況魔耶云云。

50 婆沙明、新發意菩薩、先念仏色相・相體・相業・相果

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

報。聞經大歡喜（三卷本・九〇五c、一卷本・八九九b）

自念仏無所從來、我亦無所至。……我所念即見、心作仏、心自見、心是仏、心是怛薩阿竭、心是我身、心見仏。心不自知心、心不自見心。心有想為癡、心無想是泥洹。是法無可樂者、皆念所為。設使念為空耳。設有念者亦了無所有（三卷本・九〇五c—九〇六a、一卷本・八九九b—c）。（大智度論卷第三十、大正藏二五・二七六b）

仏爾時頌偈曰、

心者不知心 有心不見心 心起想則癡 無想是泥洹
是法無堅固 常立在於念 以解見空者 一切無想念（三

卷本・九〇六a、一卷本・八九九c）

仏爾時頌偈言、……諸仏從心解得道 心者清淨明無垢 五
道鮮潔不受色 有解是者成大道（三卷本・九〇八c—九〇
九a）

當得仏印、印當善供養。何等為仏印、所識不当行、無所貪、
無所求、無所想、無所著……所有尽、所欲尽。無所從生、
無所滅、無所壞、無所敗。道要道本是印中。阿羅漢・辟支
仏、不能壞、不能敗、不能缺。愚癡者便疑是印、是印是為
仏印（三卷本・九一九b、一卷本・九〇二c）

（阿毘曇三十二相品中、一一相有三種分別、……一說相体、

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

・相用、得下勢力。次念佛四十不共法、心得中勢力。次念實仏、得仏上勢力。而不著色法二身。偈云、不食著色身、法身亦不著、善知一切法永寂如虛空。

勸修者

- 55 常行三昧、於諸功德最為第一。
- 52 若人欲得智慧如大海、
令無能為我作師者、
- 53 於此坐不違神通、悉見諸仏、悉聞所說、悉能受持者、
- 54 不持神足……便於是間坐、見阿彌陀仏、聞所說經、悉受得
(三卷本・九〇五a、九〇四b)、般舟三昧名見諸仏現前菩
薩。……雖未得天眼天耳、而能得見十方諸仏、亦聞諸仏所
說經法(毘婆沙論卷第九、大正藏二六・六八c)

二説相果、三説得相業。……有是相故能得勢力(毘婆沙論卷第八、大正藏二六・六四c・一六五c)、菩薩應以此四十不共法、念諸仏法身、仏非色身故、是偈次第略解四十不共法六品中義。是故行者先念色身仏、次念法身仏。何以故、新發意菩薩、應以三十二相八十種好念佛、如先說。転深入得中勢力、應以法身念佛。心転深入得上勢力、應以実相念佛而不食著。不染著色身 法身亦不著 善知一切法 永寂如虛空 是菩薩得上勢力、不以色身法身深食著仏。何以故、信樂空法故、知諸法如虛空。虛空者無礙(毘婆沙論卷第十二、大正藏二六・八六a)

所得智慧如大海(三卷本・九〇三b、九〇八b)

入諸慧中、學諸仏法、無有能為作師者(三卷本・九〇三b)
不持神足……便於是間坐、見阿彌陀仏、聞所說經、悉受得
(三卷本・九〇五a、九〇四b)、般舟三昧名見諸仏現前菩
薩。……雖未得天眼天耳、而能得見十方諸仏、亦聞諸仏所
說經法(毘婆沙論卷第九、大正藏二六・六八c)

一法行常當習持常當守、不復隨余法、諸功德中最第一(三
卷本・九〇四b)

此三昧是諸仏母、仏眼・仏父・無生大悲母。一切諸如來從是二法生。

碎大千地及草木為塵、一塵為一仏刹、滿爾世界中宝用布施、其福甚多、不如聞此三昧不驚不畏。況信受持詠誦為人說。況定心修習如構牛乳頃。況能成是三昧。故無量無邊。

婆沙云、劫火・官賊・怨毒・龍獸・衆病侵是人者、無有是處。此人常為天龍八部・諸佛、皆共護念稱讚。皆共欲見共來其所。

菩薩善法父 智慧以為母 一切諸如來 皆從是二生
人言、般舟三昧及大悲名諸仏家、從此二法生諸如來、此中般舟三昧為父、大悲為母。復次般舟三昧是父、無生法忍是母、如助菩提中說、 般舟三昧父 大悲無生母 一切諸如來 從是二法生 (毘婆沙論卷第一、大正藏二六・二五c)。
(大智度論卷第三十五、大正藏二五・三一四a)

譬如有人能摧碎三千世界地皆如微塵、又三千大千世界中所有草木花葉一切諸物皆為微塵。毘陀婆羅、以一微塵為一仏世界、有爾所世界皆滿中上妙珍寶以用布施。跋陀婆羅於意云何、是人以是布施因緣得福多不、甚多世尊。仏言、毘陀婆羅、我今笑語汝、若有善男子、得聞諸仏現前三昧、不驚不畏其福無量。何況信受持詠誦諷為人解說。何況定心修習、如一構牛乳頃。毘陀婆羅、我說此人福德尚無有量。何況能得成是三昧。……是三昧得如是無量無邊果報 (毘婆沙論卷第十二、大正藏二六・八七c-一八八b)。(三卷本・九〇七c-一九〇八b、一卷本・九〇〇b-一c)

仏又告毘陀婆羅、若有善男子善女人、受持詠誦為人說、若劫盡時設墮此火、火即尋滅。……若有官事、若遇怨賊・師子・虎狼・惡獸・惡龍・諸毒虫等、……若害身若害命若毀戒、無有是處。……若得眼耳鼻舌口齒病風寒冷病如是等種

59 若聞此三昧如上四番功德皆隨喜、三世諸仏菩薩皆隨喜、
復勝上四番功德。

60 若不修如是法失無量重寶、人天為之憂悲。

61 如龜人把栴檀而不嗅。

種余病、以是病故而失寿命、無有是處。……若人受持詭誦
是三昧者、諸天守護諸龍夜叉摩睺羅伽人非人四天王帝釋梵
天王諸仏世尊皆共護念。……復次是人皆為諸天所共稱讚乃
至諸仏皆共稱讚。復次諸天皆欲見是菩薩來至其所、乃至諸
仏皆欲見是菩薩來至其所。（毘婆沙論卷第十二、大正藏二六・
八八a）・（三卷本・九一二c・九一三a、一卷本・九〇一c）
若有人但聞是三昧、以四種隨喜迴向阿耨多羅三藐三菩提、
常求多聞。如過去諸仏行菩薩道時隨喜是三昧、我亦如是。
如今現在菩薩隨喜是三昧、我亦如是。如未來諸仏行菩薩道
時隨喜是三昧、我亦如是。如過去未來現在菩薩所行三昧、
我亦隨喜皆為得多聞、我亦如是求多聞故、隨喜是三昧。颱
陀婆羅、是隨喜福德、於上福德百分不及一、百千万億分不
及一、乃至算數譬喻所不能及。（毘婆沙論卷第十二、大正藏二
六・八八b）
不精進行、……亡我爾所珍寶。……一切諸天人民、皆為大
悲憂言、乃亡我爾所經寶、用失是深三昧故。仏言、是三昧
經者、是仏所囑、仏所稱譽（三卷本・九〇七a、一卷本・九〇
○a）
譬如颱陀和、愚癡之子、有人与滿手栴檀香、不肯受之、反
謂與之不淨栴檀香。……癡人閉目不視不肯嗅云云（三卷本

譬如賈客持摩尼珠、示田家癡子、其人問賈客、評此幾錢。
……仏言、其人殊不曉其価、反形是摩尼珠言、其価能与一
頭牛等不。寧可貿一頭牛想。云云（三卷本・九〇七b、一卷
本・九〇〇a—b）

この常行三昧は、右の対照表の(2)にいう如く、『般舟三昧經』を根拠として説示されたものであり、この『般舟三昧經』には、訳者不明の『般舟三昧經』一巻（以下略して一巻本とよぶ）と、後漢の支婁迦讖訳の『般舟三昧經』三巻（以下略して三巻本とよぶ）があり、異訳に訳者不明の『拔陀菩薩經』一巻、隋の闍那崛多訳の『大方等大集經賢護分』五巻の四本が現存している。訳出された順序をみると、『拔陀菩薩經』が最古で、つぎに一巻本、さらに三巻本、そして『大集經賢護分』の次第であると思われる。この中で智顕が依用し根拠としたのは、『摩訶止觀』の引用語句からみて、一巻本と三巻本であると考えられるので、右の対照表には一巻本と三巻本とを挙げたわけである。また右の対照表下段の典拠からも明らかとなるように、『十住毘婆沙論』を直接・間接前後八回にわたって経証として

引くことからも、『般舟三昧經』と同等にこの常行三昧の有力な根拠となっていることが知られる。事実、『十住毘婆沙論』には般舟三昧について隨處で廣説しているので、この論を依用し根拠としたであろうことが想像される。さて右の対照表によつて明らかに如く、殆んどの説相は『般舟三昧經』および『十住毘婆沙論』と同様であるが、以下、相違点について考察を加えてゆくに、(3)・(5)の上段にいう如く、この常行三昧をして仏立三昧と命名したのであるが、經には、「現在諸仏悉在前立三昧」とか、「十方諸仏悉在前立三昧」等といい、定中に十方諸仏が現前することを観ることができるので、この名があり、智顕はこの意をとつて呼称したと思われる。

また、(1)の上段に「唯だ専ら行旋し」と、般舟三昧の身儀を常行すなわち行旋と規定したわけであるが、般舟三昧

經の一巻本も三巻本も行旋とは明示していない。『般舟三昧經』所説の經行を行旋と規定したという説もあるが、しかし三巻本に、

道行して量ること無く称すべからざれば、無数億劫中に至る。仮使人有りて名を受持し、周旋せらる處夢中の如し。是の如く勇猛して世間を導びき、皆な當に無上道を得逮得すべし。⁽¹⁵⁾

と説かれ、また、

周旋せらる處是の法を聞きて、當に普ねく諸学者に宣示すべし。仮使億千那術劫、是の三昧を求むるも聞くこと不得がたし。⁽¹⁶⁾

と説示されるよう、「周旋」について述べてあるので、智顕はこれを「行旋」と規定したかと考えられる。

さて、『般舟三昧經』四事品第三には、具体的にこの三昧を得る方法として、四種の四事法を説示し、この四種四事法中何れか一種の四事法を成就すれば、疾かに般舟三昧を逮得す、という。いま四種四事法を示せば、

第一四事法……(一)所信無有能壞者・(二)精進無有能逮(退)
者・(三)入所入・智慧無有能及者・(四)常与善師從事⁽¹⁷⁾

第二四事法……(一)不得有世間思想、如指相彈(彈指)頃

三月・(二)不得臥出(睡眠)三月、如指相彈(彈指)頃
・(三)經行不得休息(不得坐)三月、除其飯食左右・(四)
為人說經、不得望人衣服飲食(供養)

第三四事法……(一)合會人至仏所・(二)合會人使聽經・(三)不
嫉(妬)・(四)教人學仏道

第四四事法……(一)作仏形像(若作画)、用(成)是三昧
故・(二)用是三昧故、持好(足)素(令人)写是三
昧・(三)教自貢高人內仏道中・(四)常護仏法⁽¹⁸⁾

と規定されている。そこで、(1)の上段の連文の「九十日を一期となす」という文、あるいは(23)・(25)の上段の「九十日云云」という文の如く期間を先の常坐三昧と同様に九十日と規定しているのであるが、『般舟三昧經』には直接九十日と述べる文はない。恐らく、右に引いた四種四事法中の第二四事法に基づいて九十日と設定したものと考えられる。⁽¹⁹⁾

つぎに、口業についてみると、(25)・(26)の上段には「念」すなわち觀念佛を『般舟三昧經』に基づいて規定する。さらには、(24)・(26)・(27)の上段に述べる如く「唱」すなわち称(唱)名(念佛)を規定しているのであるが、『般舟三昧經』には一

巻本も三巻本も何等闇説されていないのである。智顕は称

名念佛について、『摩訶止観』卷第七上には、

若し睡の障道の罪起らば、即ち念佛觀を用いて之を治せ。念佛の無相の相を縁じ、相を縁すること分明なれば、障道の罪を破し、十方の仏を見、理觀と相應して涅槃の門を開く。⁽²⁰⁾

と述べ、睡障の対治法として念佛を用いるとし、また卷第八下にも、

法門の仏を念じて報果の悪業を助破す。念佛の力の故に悪業の障転すれば、則ち涅槃の門に入るなり。⁽²¹⁾

と、悪業障の対治法として、念佛をすすめていることなどから、智顕はこの口業の念佛に現世利益的な効果があると考へたかと推定される。そこで智顕はこれらの称名念佛を主張するについて、直接典拠としたのは何であるかを問うに、『十住毘婆沙論』が考へられ、卷第五には、

若し菩薩、此の身に於いて阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲さば、應に是の十方諸仏を念じ其の名号を称うべし。……若し人一心に其の名号を称せば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得。……阿弥陀仏および諸の大菩薩の名を称し一心に念ずれば、亦た不退転を得。……更に阿弥陀等の諸仏あ

り、亦た應さに恭敬し礼拝して其の名号を称すべし。……是の諸仏世尊は、現に十方清淨の世界に在ます。皆名を称し憶念す。阿弥陀仏の本願是くの如し。若し人、我れを念じ名を称して自ら帰すれば、即ち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得べし。⁽²²⁾

いうのではないのである。ところが、のち唐宋代になると導綽・善導系の淨土教思想の影響もあってか、この文を根拠として、四種三昧中この常行三昧が最も重要であり、ひいては阿弥陀仏こそ正当の本尊であるという異義が有力となってくる。しかし智顗は四種三昧について、『摩訶止観』卷第二下に、

復た次に四種三昧、方法は各異なるも、理観は則ち同じ。……また理観の意を得ざれば事相の助道もまた成せず。理観の意を得れば事相の三昧任運に自ら成す。⁽²³⁾

と述べる如く、事相はそれぞれ相互に相異するが、理観は同じであり、事観の目的も終局的には理観にあるというのである。諸の淨土經典が往生極樂の行法として説く唱念弥陀の法は、ここにおいては、三昧成就のため、現在において一念三千の妙理を体達せんがための方便・手段にはかならぬというのである。故に、上記の説は智顗の真義を歪曲した展開であるといわねばならない。

さてつぎに意の止観についてみると対照表の(31)と(50)下段

に典拠を示した如く、殆んどの説相は『般舟三昧經』の所説に基づいて廣説されている。しかし、(50)の上段の文のみはその下段に示したように、『般舟三昧經』にはなく、『十住毘婆

沙論』の助念佛三昧品の文を典拠として述べているのであるが、敢えてこの論に基づいて廣説するには、何等かの理由があると考えられる。いまここに『十住毘婆沙論』卷第十二の文を示すに、

菩薩は應さに此の四十不共法を以て諸仏の法身を念すべし。仏は色身に非ざるが故に。是の偈は次第して、略して四十不共法六品中の義を解す。是の故に行者は、先ず色身仏を念じ、次に法身仏を念ぜよ。何を以ての故に、新發意の菩薩は、應さに三十二相八十種好を以て仏を念すべし。先に説くが如し。転た深入して中の勢力を得ば、應に法身を以て仏を念すべし。心転た深入して上の勢力を得ば、應さに實相を以て仏を念じ、而も貪著せざるべし。色身に染著せず、法身にも著せず、善く一切法を知り、永く寂して虛空の如し。是の菩薩は上の勢力を得て、色身・法身を以て仏に貪著せず。何を以ての故に、空法を信樂するが故に、諸法は虛空の如しと知る。虛空とは障礙なきが故なり。⁽²⁴⁾

と述べ、念佛三昧を成就するためには、まず仏の色身である三十二相八十種好を念すべきであり、つぎに実は仏の本身は法身であるので仏の四十不共法を念じてゆけば、段々

に修行の勢力が加わってきて、色身・法身の分別や貪著も自然になくなり、終には諸法の実相なるを知り、全ての障礙を離れて寂滅無為の境界に到達するというのである。智顕がこの文を依拠とした背景には、般舟三昧がただ単に見仏することのみに真義があるのでなく、終局的には円融三諦の実相原理を体証することをいわんとしたためであると考えられるのである。

注

- 1 『日本仏教学会年報』第四十一号、一一一頁—一三七頁。
- 2 『摩訶止観輔行伝弘決』卷第二之一（大正藏四六・一八二a-b）
- 3 『摩訶止観』卷第一上（大正藏四六・五b）
- 4 『大品般若經』卷第三（大正藏八・二三七c—二三八b）
- 第五（同・二五一a—二五三b）に説示され、『大智度論』では、卷第四十三（大正藏二五・三七二c—三七三b）、卷第十四（同・三九六b—c、三九八b、四〇一b）に出ている。
- 6 『大智度論』卷第四十七（大正藏二五・四〇一b）
- 7 『文殊所説般若經』卷下（大正藏八・七三一a—b）
- 8 『摩訶止観』卷第二上（大正藏四六・一一b）
- 9 『摩訶止観』卷第一上（大正藏四六・一c—一一a）

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

10

曇鸞は『無量寿經優婆提舍願生偈婆薮槃頭菩薩造並註』（淨土論註）卷下に、「訖奢摩他曰止、止者止心一處不作惡也。……

奢摩他云止者今有三義、一者一心專念阿弥陀仏如來、願生彼土、此如來名號及彼國土名號能止一切惡・二者彼安樂土過三界道、若人亦生彼國、自然止身口意惡・三者阿彌陀如來正覺住持力自

然止求聲聞辟支佛心。此三種止、從如來如實功德生。是故言欲如實修行奢摩他故。……訖毘婆舍那曰觀。……如觀身無常苦空無我九相等皆名為觀。……心緣其事曰觀。（大正藏四〇・八三五c—八三六a）と、止觀を論じているのであり、また僧稠に

も『続高僧伝』卷第十六によれば、「撰止觀法兩卷」（大正藏五〇

・五五四c）とあり、止觀法の撰述があつたと伝えられるが、残念ながらいまに伝わらない。さらに淨影慧遠も『大乘義章』卷第十に、止觀捨義八門分別（大正藏四四・六六五b—六六八a）の項を設定して詳説している。

11 12 『大智度論』卷第七（大正藏二五・一一一b）

13 14 『隨自意三昧』（元続藏經通卷九八・三四七b—c）。なお、智顕が四種三昧を体系づけるについて、南岳慧思の思想的実践的影響が濃厚である。このことに関しては、拙稿「天台智顕の三昧思想考」（『日本仏教学会年報』第四十一号）を参照されたい。

『摩訶止観』卷第二之一（大正藏四六・一八二c）

『摩訶止観』卷第一上（大正藏四六・一c—一一a）

四種三昧の典拠とその考察（上）（大野）

四 a)・卷第九（同・六八c）・卷第十二（同・八六a一八八c）等に出づ。また対照表の下段に明らかに、『大智度論』も根拠としているが、『大智度論』にも般舟三昧について、卷第四（大正藏二五・八六c）・卷第七（同・一一a）・卷第二十九（同・二七六a）・卷第三十三（同・三〇六a）・卷第三十四（同・三一四a）・卷第三十五（同・三一〇a）・卷第三十七（同・三三五b）・卷第四十九（同・四一六a）等にも述べられている。

本文²⁰の上段にみられる如く、この第二四事法は、智顥が身儀を規定するのに典拠としている。

『摩訶止観』卷第七上（大正藏四六・九三a一b）
『摩訶止観』卷第八下（大正藏四六・一一四c）
『十住毘婆沙論』卷第五（大正藏二六・四一b一四三a）
『摩訶止観』卷第二下（大正藏四六・一八c）
『十住毘婆沙論』卷第十二（大正藏二六・八六a）

17 16 15
18
19
20
21
22
23
24
三卷本『般舟三昧経』卷上（大正藏一三・九〇六a）・一巻本
三卷本『般舟三昧経』卷中（大正藏一三・九一二a）
『般舟三昧経』卷下（大正藏一三・九一九b）

〔昭和五十一年度文部省科学研究費（総合研究・A）による研究成果の一部〕

『般舟三昧経』（同・八九九c）に出づ。この文は智顥が本文の¹⁹に引用している。

三卷本『般舟三昧経』卷上（大正藏一三・九〇六a）・一巻本